高校教育における日本とシンガポールのメリトクラシー ——選抜度の低い学校に着目して——

シム・チュン・キャット (Sim Choon Kiat)

1. 問題の背景と本稿の目的

本稿の目的は、日本とシンガポールの教育制度における選抜度の低い学校にスポットを当て、そこでおこなわれる教育のインプット、スループットおよびアウトプットを分析することによって、学校教育における両国のメリトクラシーのあり方について比較することである。

メリット、つまり能力ある、かつ努力する人々がエリート的存在になる社会のことをメリトクラシーという (Young 1958)。多くの現代福祉国家はメリトクラシーを国造りの礎に、人的資源を効率的に吸収し、経済的成功や国家の地位向上を達成した。「アジアの奇跡」と賞された日本およびシンガポールもその例外ではない。また国土の広さこそ違うものの、天然資源に乏しく人材資源しかないという点において、日本とシンガポールには大きな共通点がある。両国では、優れた人材を中心に人間そのものが活動して富を構築するしかないのである。そして、優れた人材を選出するために、日本とシンガポールは学校教育にメリトクラシーを導入し、能力主義的に教育選抜をおこなってきた。その特徴を異にするとはいえず、日本とシンガポールの学校教育において、メリトクラシーが土台になっていることは疑いがない。

しかし従来の研究がしばしば指摘してきたように、いかなるメリトクラティックな教育制度といえども、教育達成における階層間の平等を実現することは困難であり、学校の選抜度と出身階層との間には常に強い関連性がみられる (秦 1977, 佐藤 2000, 荻谷 2001など)。教育にできることは、むしろ階層間の不平等を拡大し

ないこと、できればある程度縮小することであるかもしれない(荻谷 2001)。ところが、日本では近年、教育における階層間の不平等が拡大し、メリトクラシーの規範が相対的に低い階層出身者から崩れつつあることが見出されている(佐藤 2000, 樋田他 2000, 荻谷 2001)。教育における階層差がこのまま広がると、社会不安や政治不安の原因になりかねないという危機感が共有されているといえる。教育格差による影響が「後から」しかわからないだけに、今のうちに是正策を講じないと日本の将来が危ぶまれると、多くの研究が警鐘を鳴らしている。にもかかわらず、階層間格差を克服するように、学校教育への、とりわけ低い階層出身者が集中するであろう選抜度の低い下位校への根本的な改革が一向に進んでいない。日本のこの現状を打破するためにも、日本と同様に人的資源が唯一の資源であると自他ともに認められるシンガポールとの比較研究によって何らかのヒントを得ることができるのではないかというのが本稿の出発点となる問いである。

そこで本稿は、日本とシンガポールとのメリトクラシー規範の特徴を明らかにすべく、その規範が揺らぎやすいとされる選抜度の低い学校に焦点を当てて分析のメスを入れることにする。そして、本稿が目指す目的は次の3点を解明することである。

- (1) まず、日本とシンガポールの両国において、どのような生徒がどのような動機を持って下位校に入学するのか(インプット)。
- (2) つぎに、下位校の授業や先生について生徒はどのように考えているのか(スループット)。
- (3) 最後に、生徒の進路希望にみられる教育アスピレーションや学校教育を通じて引き出される学習意欲はどのようなものであるのか(アウトプット)。

2. 先行研究の検討

シンガポールの学校生徒は、90年代半ばから国際学力比較調査で常に上位を占めており、その教育制度に対して近年注目が集められている。日本国内でも、シンガポールの教育に関する研究が、数はまだ少ないものの、少しずつ蓄積されるようになってきている。なかでも、耳塚他(2003)が実施した日星比較研究は示唆に富んでおり、教育選抜における日本とシンガポールとの違いを明確にする点で十分に意味のある研究成果を提示している。

耳塚を代表とするその研究グループは、日本とシンガポールそれぞれ1300人ほどの高校生を学校の選抜度で5グループに分けて調査分析をおこなった⁽¹⁾。同調査の

主な成果は、以下のようにまとめることができる。

- (1) 1日平均の家での学習時間について、選抜度の高い上位校では日本生徒の学習時間が長いものの、選抜度の低い下位校では生徒の学習離れが進んでいる。他方、シンガポールでは学校グループ間の差はほとんどなかった。
- (2) また日本では、校種を統制した後も、出身階層によって学習時間に大きな差が見られるのに対し、シンガポールではそのような階層の影響は大きくなかった。
- (3) 学校の有効性や授業の有用性についても、日本は選抜度の低い学校ほど消極的な回答が増えるのに対し、シンガポールは、学校の選抜度によらずほとんど同じように積極的な回答が並んでいた。

以上の結果から、同研究調査では、日本におけるメリトクラシー規範が揺らぎ、それも相対的に選抜度の低い下位校や低い階層出身者から崩れつつあるのに対し、シンガポールではメリトクラシー規範が学校の選抜度を問わず依然として保持されているという結論に達した。しかしながら、日本に関する知見は他の研究でもすでに指摘されているものであり(樋田ほか 2000, 佐藤 2000, 荻谷 2001など)、ここでの成果は日本におけるメリトクラシーが弛緩したという主張を補強する結果になりこそすれ、それほど新しい発見ではないといえる。むしろ、ここで重要なのは、なぜシンガポールではメリトクラシー規範が強く維持されているのに、逆に日本ではそれが保たれていないのかという問題である。さらに興味深いことに、同研究の結果によれば、選抜度の高い上位校だけをみると、日本生徒はシンガポール生徒に勝るとも劣らずにメリトクラシー規範を遵守しているのに、下位校となると、その差は雲泥のごときものとなる。両国の下位校におけるどのような違いがこのような差をもたらしているのか。シンガポールの下位校にあって日本の下位校にないものは何なのか。これらの問いに対しては、Sim (2004) の研究にそのヒントを得ることができる。

Sim によれば、シンガポールの技術教育校 (Institute of Technical Education, 略称 ITE) はまさに下位校の典型である。ITE は毎年同じコホートの25%の中卒者を受け入れる公的教育機関であり、そこに通う生徒のほとんどは、同じ中等後教育段階にあたるジュニア・カレッジやポリテクへの入学資格さえ持たない学力の低い者である。また、ITE 生徒の多くは、小・中学校において上位校や上位コースとは無縁であった者であり、出身階層も低い。ところが、同研究によると、ITE 生徒は選抜の「敗者」であるにもかかわらず ITE への入学後にそれまで低かった教育アスピレーションが上昇するばかりでなく、学習にも時間を費やしていることが明らか

になっている。

その背景として、次のことが考えられると Sim は主張する。まず、ITE は卒業生や企業を調査し、生徒が将来つく仕事の中身と合うようにカリキュラムや指導方法を常に見直している。また、教師たちが勉強する意味を強く説き、卒業生の進路や「サクセス・ストーリー」に関する出版物を生徒たちに配る工夫もある。さらに、優秀な ITE 生徒なら、ITE からポリテクへ、ポリテクから大学への「敗者復活ルート」もはっきりしている。このように、シンガポールではアカデミックなルートに適しない者を早期に選び出し、彼らに技術能力を基準とする別の競争ルートを提供することによって、「敗者」の学習意欲を再燃させ、メリトクラシーの規範を維持しているのである。言い換えれば、メリトクラシーの規範がシンガポールで維持されている背景には、選抜の「敗者」に対するアフターケアを担う ITE の役目が非常に大きいと言わざるを得ない。

一方、メリトクラシー規範が弛緩したとされる日本の下位校の場合はどうであろう。従来の研究では、下位校のあり方に研究の主眼がほとんど向けられなかったため、この点は疑問として残されている。この節の冒頭でふれた、耳塚を代表とする研究グループの調査結果をみても、この点は明らかにされていない。なぜなら、同研究では教育のアウトプットとなる生徒の教育アスピレーションや学習意欲に焦点が当てられたものの、それに関連する学校教育のインプットとスループットについては十分な吟味がおこなわれたとはいえないからである。しかも、同研究調査によれば、日本下位校生徒のなかにも、勉強に時間を費やす者がまったくいないわけではない。それでは、勉強する日本下位校生徒としない下位校生徒とを分けているのはいったい何であろうか。この問いについても、十分に答えが見つからないでいる。

上述した諸々の疑問を解明するためにも、シンガポールの ITE を比較の鏡として、メリトクラシー規範が揺らいでいるとされる日本の下位校にメスを入れることを不可欠とする。またそれによって、日本のメリトクラシー規範の変容をめぐるこれまでの理論に新たな視座を提供することが本稿のもう一つの狙いである。

3. データと方法

本稿で用いるのは、前述した耳塚他（2003）および Sim（2004）が使ったものと同一のデータである。調査の概要は表 1 に示す通りである。

表 1 調査概要

	シンガポール調査	日本調査
時期	2002年 8～9月	2002年10～12月
対象	ITE 最終学年の生徒573人 (女性数215)	A 県 B 地区の専門学科下位校 3 年生221人 (女性数78) および普通科下位校 3 年生183人 (女性数90)
比較対象	上位校ジュニア・カレッジ最終学年 の生徒371人 (女性数199)	普通上位校 3 年生228人 (女性数126)
方法	インターネットを通じてのオンライン 自記式英文質問紙調査	質問紙による集団自記式調査

2つの調査は、言語は違うものの、両国で使われた質問紙はほぼ同じ内容である。また、日本の対象校のランクづけは生徒の中学成績（自己申告）に基づいておこなわれたが、校長を含む学校関係者の間での評判と一致していた。

4. 日本とシンガポールにおける下位校の特徴

4.1. ダブルチャンスのシンガポール下位校 vs ノーチャンスの日本下位校

まず、どのような生徒が下位校に入学するのかをみてみよう。表2は、質問紙調査から得られた、両国の上・下位校生徒の中学時の成績、家の豊かさ、親学歴および親職を示している。表から、両国の下位校生徒の成績は同国の上位校生徒に比べると、非常に低いことが読み取れる。きびしいトラッキング制度を施すシンガポールでも、明確なトラッキング制度のない日本でも、学校間の学力差は一目瞭然である⁽²⁾。つぎに、家庭の経済環境については、日本生徒の場合は統計的に有意ではないものの、シンガポールの ITE 生徒と同様に、日本下位校生徒の家はやはり相対的に豊かではないことが表からわかる。また、同国の普通上位校生徒のプロフィールに比べると、両国の下位校生徒では親学歴が低く、親職をみても威信の低い職業が多くなっている⁽³⁾。「ウルトラ・メリトクラティック」(Rodan 1989) とよばれているシンガポールでも、メリトクラシーが弛緩した日本においても、教育選抜の「敗者」である下位校生徒の出身階層はともに低いのである。この学校の選抜度と生徒の出身階層との関係についての事実、シンガポールの現顧問相リー・クアン・ユーの言葉を借りれば、「これが人生の現実だ、誰にも変えることができない」(It's a fact of life, and you can't change it.) のかもしれない⁽⁴⁾。

なお、表2をみると、無回答の比率が日本の生徒で、とりわけ日本下位校の生徒でかなり高いことがわかる。特に父職と母職についての日本下位校生徒の無回答率がともに2割を越えていることに注意されるべきであろう。

表2 生徒プロフィール

(%)

		日本		シンガポール	
		下位校	上位校	ITE	ジュニア・カレッジ
中学時成績 (シン：中学トラック)	上位	0.2	83.3	0.5	48.8
	中位	32.0	12.8	51.3	48.5
	下位	58.4	0.8	43.1	0.3
	無回答	9.4	3.1	5.1	2.4
	合計	100	100	100	100
(日本：***, シン：***)					
経済的豊かさ (シン：世帯月収#)	豊か	5.4	6.6	2.9	21.1
	やや豊か	26.7	34.2	36.1	56.3
	豊かでない	47.2	39.5	58.0	21.9
	わからない	10.9	7.9	—	—
	無回答	9.7	11.8	3.1	0.8
	合計	100	100	100	100
(日本：—, シン：***)					
父職	専門・管理・事務職	24.8	51.8	28.3	58.8
	その他	54.9	33.3	70.0	40.7
	無回答	20.3	14.9	1.7	0.5
	合計	100	100	100	100
(日本：***, シン：***)					
母職	専門・管理・事務職	25.5	42.5	11.7	23.2
	その他	53.2	42.6	87.3	76.5
	無回答	21.3	14.9	1.0	0.3
	合計	100	100	100	100
(日本：***, シン：***)					
父学歴	大卒かそれ以上	13.8	48.6	4.3	28.6
	短大専各	7.9	6.6	} 9.9 }	21.7
	高校	50.2	27.6		
	中学	8.9	2.6	16.8	21.3
	中卒以下	—	—	67.7	27.0
	その他	4.2	0.8	—	—
	無回答	14.9	13.6	1.2	1.6
	合計	100	100	100	100
(日本：***, シン：***)					
母学歴	大卒かそれ以上	7.7	24.1	1.9	15.1
	短大専各	19.1	26.3	} 6.4 }	19.4
	高校	51.2	35.5		
	中学	4.7	0	18.1	32.3
	中卒以下	—	—	72.5	32.9
	その他	3.4	0.4	—	—
	無回答	13.9	13.6	0.9	0.3
	合計	100	100	100	100
(日本：***, シン：***)					

***：0.1%水準で有意

#：シンガポールの世帯月収はSim (2004) を参考にした。

(世帯月収 S \$ 2000未満＝豊かでない, S \$ 2000～S \$ 7000＝やや豊か, S \$ 7000以上＝豊かとした。)

表3 入学動機

(「とてもあてはまる・まああてはまる」と答えた生徒の比率)

		日本		シンガポール
		普通下	専門下	ITE
1	自分の成績とあっていた	57.9	79.9	86.7
2	進学準備に有利である	41.6	32.0	90.2
3	企業や産業が求める知識を教えてくれる	19.9	60.3	89.8
4	将来の職業選択のはばを広げてくれる	47.3	63.5	89.8
5	授業内容が自分の興味関心にあっている	44.2	48.0	83.2

注) 無回答は除いた

いまひとつのインプットとしての下位校生徒の入学動機を示したのが表3である。表をみると、「自分の成績とあっていた」と答えた生徒の比率が、日本の普通下位校では57.9%と比較的に低いものに対して、専門学科下位校と ITE では、それぞれ79.9%と86.7%と非常に高くなっていることがわかる。一方、「進学準備に有利である」については、「あてはまる」と答えたシンガポール生徒は日本生徒よりはるかに多い。日本の下位校、とりわけ専門学科では生徒もそこが進学の準備をさせる教育機関ではないことを明確に認識していることがうかがえる。つぎに、「企業や産業が求める知識を教えてくれる」「将来の職業選択のはばを広げてくれる」の質問項目については、より多くのシンガポール生徒が肯定的に答えている。企業の変化に対応すべく、ITE が常に教育内容を見直していることがこういう結果につながると考えられる。最後に、「授業内容が自分の興味関心にあっている」と答えたシンガポール生徒が8割を越えているのに対して、日本生徒の場合では5割を切っていることに注目されるべきである。

2つのインプットについての以上の分析から、次のことが言える。日本とシンガポールの下位校生徒はともに中学時成績や出身階層が低いものの、客観的な教育制度と学校のあり方などに違いがあるため、学校に対する入学時の主観的な「期待」と「構え」がかなり異なる。シンガポールの下位校生徒にとって、ITE は、進学準備に有利であるだけでなく、企業が求める知識を教えてくれたり、将来の職業選択の幅を広げてくれたりする学校でもある。言い換えれば、ITE は、進学も就職も有利にさせる、ダブルチャンスを与えてくれる機関である。反対に、日本の下位校生徒にとって、いま通う学校が進学を有利にさせてくれることもなければ、就職のチャンスを広げてくれることもなく、まさにノーチャンスなのである。インセンティブ不在のこのような状態では、メリトクラシーの規範が日本の下位校で弛緩しつつ

あるのも驚きではなからう。

4.2. 元気なシンガポール下位校 vs 元気のない日本下位校

表 4 学校での学習 (「とてもあてはまる・まああてはまる」と答えた生徒の比率)

		日本		シンガポール
		普通下	専門下	ITE
1	授業はおもしろい	39.9	37.1	79.0
2	自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い	27.4	38.4	92.0
3	先生は勉強やテストが重要だと強調している	57.4	53.9	86.7
4	先生はわたしがよい成績をとることを期待している	26.3	27.1	76.8
5	先生は学問的にとても優れている	47.5	49.1	85.7

注) 無回答は除いた

下位校でどのような教育がおこなわれているのかを把握するのに、授業および先生に対する生徒側の見方をみることによって手がかりを得ることができる。表 4 をみると、「授業はおもしろい」と答えたシンガポールの ITE 生徒が 8 割近くいるのに対し、日本の下位校では、そう答えた生徒が 4 割にも満たず、なかでも一番少ないのが実習や実験が多いはずの専門学科下位校であることがわかる。また、「自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い」と答えた ITE 生徒が 9 割をも越えているのに、そう答えた日本の普通下位校生徒と専門学科下位校生徒はそれぞれ 3 割と 4 割を切っている。さらに、生徒側からみた先生像については、「勉強やテストが重要だと強調している」先生、「わたしがよい成績をとることを期待している」先生や「学問的にとても優れている」先生が、シンガポールと比較して日本の下位校で非常に少ないことを読み取ることができる。

以上から、授業がおもしろいだけでなく、勉強の重要性を強く説き、生徒がよい成績をとることを期待する優秀な先生が多数いて生徒も元気な ITE のイメージと、そのすべてが反対である「元気のない」日本下位校のイメージが浮かぶ。

4.3. 学習意欲の高いシンガポール下位校生徒 vs 低い日本下位校生徒

本節では、2つのアウトプットに着目する。一つは生徒の進路希望にみられる教育アスピレーションであり、もう一つは学習意欲である。

図 1 は、調査時に複数の時点を回顧してもらって得た希望進学先の変化を学科別に示したものである。Sim (2004) が明らかにした ITE 生徒の場合と同様に、日本

高校教育における日本とシンガポールのメリトクラシー

図1 希望進学先の変化（日本のみ）

下位校生徒の場合も、小・中学校の時点から、教育アスピレーションが「高校まで」という者が多く、逆に四年制大学への進学を希望する者の比率が低い。日本でも、下位校生徒では自己選抜が早い時点からおこなわれることが示唆される。とりわけ専門学科下位校生徒の場合、中学校の時点ですでに四年制大学への進学をあきらめた生徒が多い。中学校や高校へ進むにつれて、「短大、専門・各種学校」への進学を希望する下位校生徒が徐々に増えていくものの、「高校まで」を希望する生徒もまだ数多く存在している。

図2は図1に示した希望進学先を教育年数に換算し、各時点の平均値をプロットし、教育アスピレーションの変化を示したものである。また比較するために、日本の普通上位校やシンガポールの上・下位校についても計算して示した。もっとも、同じ教育年数でも、四年制大学への進学率が40%近くある日本と、20%しかないシンガポールとでは、その重みがかなり異なることを考慮する必要がある。例えば、教育年数が同じ13年でも、日本では専門・各種学校や短大の年数に達しないのに対し、シンガポールではポリテクの教育年数に相当する。

図2をみると、普通上位校の生徒に比べると、日本下位校生徒の教育アスピレーションは早い時点から非常に低い。ここで強調されるべきなのは、ITE生徒の教育アスピレーションが中学校から現在にかけて急激に上昇するのに対して、日本下位校ではほとんど上昇がみられないという点である。

いまひとつのアウトプットとしての学習意欲をはかる指標として、学校外での学習時間がある(荻谷 2001)。表5は、教育アスピレーションについて、学校外での学習時間の分布を表している。合計の比率をみると、メリトクラシー規範が崩れつ

(注) 教育年数の換算は以下のようにおこなわれた。

日本：高校まで=12，専門・各種学校，短大=14，大学=16，大学院=18。

シンガポール：Sim (2004) を参考にした。

図2 教育年数に基づくアスピレーションの変化 (日本とシンガポール)

表5 学校外での学習時間の分布 (%) と平均 (日本のみ)

	教育アスピレーション	しない	30分まで	30-60分	1時間以上	平均(分)	ケース数
普通下位	高校まで	76.2	9.5	7.9	6.4	11.7	63
	短大・専各	55.3	11.8	14.5	18.4	35.1	76
	大学かそれ以上	34.1	22.0	17.1	26.8	48.3	41
	合計	65.0	13.3	12.8	16.1	29.9	180
専門下位	高校まで	77.5	12.7	4.9	5.0	12.1	102
	短大・専各	71.4	7.1	13.3	8.1	15.6	98
	大学かそれ以上	29.4	35.3	11.8	23.6	60.0	17
	合計	71.0	12.0	9.2	7.8	17.4	217

つあるとされる日本の下位校には、家でまったく勉強しない生徒がやはり大多数であることがわかる。家での学習時間がゼロであるシンガポールの ITE 生徒の比率が 17.1% でしかないことを考えれば (Sim 2004)，日本下位校生徒の学習意欲が非常に低いと指摘されるのも頷けよう。

ただし，表からは，家で多少は勉強するという下位校生徒が約 3 割はいることも看取できる。平均学習時間⁽⁵⁾をみると，教育アスピレーションが高いほど，学習時間

が長くなることが確認される。とりわけ、四年制大学かそれ以上の学歴を目指す日本の下位校生徒は1日ほぼ1時間近く家で勉強している。下位校にもメリトクラシーの規範を遵守し、勉強する生徒がいることが裏付けられる。

教育アスピレーション以外に、学習意欲を規定する要因はないのだろうか。また家でも勉強をする下位校生徒とまったく勉強しない生徒とを分けているのは何だろうか。生徒の属性や成績、および学習への構えと学校観が学習意欲にどう関連するかをみるために、「家で勉強をする」ことを従属変数としたロジスティック回帰分析をおこなった。また比較対象として、シンガポールの ITE 生徒についても同じように分析した。独立変数とその数量化の手続きは表6の通りであり、分析の結果は表7に示した。

表7から、日本とシンガポールの下位校生徒について、次の6点を指摘することができる。第一に、属性に関していえば、シンガポールでは、家で勉強するかどうか

表6 分析に用いる従属変数と独立変数

従属変数	
家での勉強	する = 1, しない = 0
独立変数	
属性： 男子ダミー	男子 = 1, 女子 = 0
父・母学歴ダミー	日本：短大以上 = 1, 以下 = 0 シンガポール：中卒以上 = 1, 以下 = 0
父・母職ホワイトダミー	専門・管理・事務職 = 1, それ以外の職業 = 0
経済的豊かさ	日本：豊かである・やや豊かである = 1, あまり豊かでない・豊かでない = 0 シンガポール：世帯月収 S \$ 2000以上 = 1, 以下 = 0
成績： 現在成績	下位 = 1～上位 = 7 の 7 段階
中3時成績	日本：下位 = 1～上位 = 7 の 7 段階 シンガポール：中・上位コース = 1, 下位コース = 0
学習への構え： 進学アスピレーション	進学する = 1, 高校まで就職 = 0
入学動機1：成績にマッチ	入学動機として、「自分の成績とあっていて」という質問に対して、 あてはまる = 1, あてはまらない = 0
入学動機2：進学に有利	入学動機として、「進学準備に有利である」という質問に対して、 あてはまる = 1, あてはまらない = 0
生徒側からみた学校観： 授業おもしろい	「授業はおもしろい」という質問に対して、 あてはまる = 1, あてはまらない = 0
先生優れている	「先生は学問的にとても優れている」という質問に対して、 そう思う = 1, そう思わない = 0
普通科ダミー（日本のみ）	普通科 = 1, 専門学科 = 0

表7 下位校生徒の学習時間を規定する要因分析(ロジスティック回帰分析)

	日本		シンガポール	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
男子ダミー	-.216	.805	-1.295**	.274
父学歴ダミー	-.119	.887	.244	1.276
母学歴ダミー	-.359	.699	.379	1.460
父職ホワイトダミー	.716*	2.047	.587	1.799
母職ホワイトダミー	.461	1.586	-.367	.693
経済的豊かさ	-.025	.975	-.162	.850
現在成績	.046	1.047	.062	1.064
中3時成績	.179	1.196	-.273	.761
進学アスピレーション	.621*	1.861	.854*	2.349
入学動機1：成績にマッチ	-.210	.811	1.106**	3.021
入学動機2：進学に有利	-.023	.978	.344	1.397
授業おもしろい	.577*	1.781	1.230**	3.421
先生優れている	.789**	2.202	1.118**	3.059
普通科ダミー	.240	1.271	-	-
N (欠損値除外)	264		348	
Model Chi-Square	40.471		50.985	
Sig.	.000		.000	
R ² Cox & Shell	.142		.136	
Nagelkerke	.195		.251	

*：5%水準で有意，**：1%水準で有意

かに対して、有意な影響をもつ変数は性別だけであり⁽⁶⁾，出身階層による影響はみられない。一方、日本では父職が有意な効果をもつことが表からわかる。日本の下位校に絞って分析をおこなっても、勉強習慣に出身階層の影響がみられる結果となった。第二に、両国のいずれにおいても、現在の学校成績や中学時成績による直接的な効果は有意ではない。両国とも、下位校では、成績の良い生徒ほど家で勉強する確率が高くなることはないことを意味する。第三に、日本でもシンガポールでも、進学を希望する生徒のほうが希望しない生徒より家で勉強する。第四に、シンガポールに限って入学動機1のほうが有意な影響を及ぼしているのに対して、日本では入学動機による有意な効果がみられない。入学動機として「自分の成績とあっていた」と答えたシンガポール生徒ほど、つまり自分の成績の位置づけを知っている生徒ほど、家で勉強する確率が3倍以上も高くなるのである。第五に、両国ともに、ほかの要因を統制した後でも、学校の授業がおもしろいと思う生徒ほど、または学校の先生が学問的に優れていると思う生徒ほど、家で勉強する確率が高くなる。第四と第五から、アウトプットである学習意欲に対して、有意な影響を持つのは主にスループットであることが認められる。そして最後に、日本の分析に普通科下位校

ダミーという変数を加えたところ、学科による影響はみられないことが確認される。

5. 結論——「レフトアウト」される日本の下位校生徒

冒頭で掲げた3つの解明課題に関する分析結果は、以下のように整理される。

第一課題のインプットについて：日本でもシンガポールでも、上位校生徒に比べると、下位校生徒の中学時成績と出身階層が非常に低い。しかしながら、進学も就職も有利になれるダブルチャンスを与えられるシンガポール下位校生徒のほうが、ノーチャンスの日本下位校生徒より、入学時の「期待」も「構え」も大きい。

第二課題のスループットについて：学校の授業のおもしろさ、そして授業を通して生徒に考えさせる要素などの面において、シンガポールの下位校に比べると日本の下位校には改善される余地が多々ある。また、シンガポールに比較すると、日本の下位校生徒からみれば、学校の先生はそれほど勉強やテストが重要だと強調したり、生徒がよい成績をとることを期待したりしない。そのうえ、学校の先生が学問的に優れていると思うシンガポールの下位校生徒が8割を越えているのに対し、そう思う日本の下位校生徒は半分にも満たない。

第三課題のアウトプットについて：シンガポールと同じく、日本でも下位校生徒の教育アスピレーションは早い時期から冷却されている。しかしITEのような再加熱装置が日本にない分、日本の下位校生徒の教育アスピレーションは、高校入学後も上昇することなくずっと低いままである。多くの日本下位校生徒は四年制大学への進学を早期にあきらめ、教育アスピレーションを「高校まで」に留めるか「短大・専門・各種学校」への進学を目指す。また、学習意欲に関しては、日本の下位校にも家で学習に時間を費やす生徒はいる。家で勉強するかどうかについて、シンガポールのITEでは出身階層による影響がみられないものの、日本の下位校では、父職がホワイト・カラーであったほうが家で勉強する確率が高くなる。さらに、進学アスピレーションや入学動機などほかの要因を統制した後も、学校の授業がおいしいと思う生徒ほど、または学校の先生が学問的に優れていると思う生徒ほど、家で勉強する確率が高くなる。

以上の知見は、日本下位校のあり方、および日本のメリトクラシーについて以下のような論点を示唆している。まず、両国の下位校のインプットからは、メリトクラシーにも教育達成における出身階層の影響を完全に除去するのに限界があることが示される。ウルトラ・メリトクラティックなシンガポールでさえ、教育達成における完全なる平等を獲得することができないでいる。しかしまさにメリトクラシー

にも限界があることが「人生の現実」だと認識しているからこそ、シンガポールでは学校のスループットを通して、出身階層が比較的に低く、アカデミックなルートに適さない下位校生徒に対して進学も就職も有利になれるダブルチャンスを提供することによって、教育のアウトプットである学習意欲とアスピレーションを再燃させようとしているのである。教育達成における不平等を完全になくすることが不可能であるものの、せめてその不平等を最小限に抑えようとシンガポールは努めているのである。

本稿の分析結果をみると、日本下位校の「元気のなさ」が改めて印象付けられる。シンガポールに比べると、日本の下位校では、授業だけでなく、学校の先生まで元気に欠けているのではないだろうか。このようにスループットが低いままでは、アウトプットとなる生徒の教育アスピレーションと学習意欲とが低下するのも無理はない。シンガポールの ITE 生徒と比較すると、日本下位校生徒のアスピレーションはクールアウトされるどころか (Clark 1960)、「レフトアウト」(のけ者に) されているような印象すら受ける。

「レフトアウト」(Left-Out) という概念は、日本下位校生徒の現状を鑑みて、筆者が独自に考案したものである。今回の調査で明らかになったのは、日本の下位校生徒が少なくとも三つの面でレフトアウトされているということである。まず、日本の下位校では、授業をおもしろくさせる努力も、生徒のアスピレーションや学習意欲を向上させる努力もほとんどみられないことが実証データにより確認されたため、日本の下位校生徒は学校内部においてレフトアウトされているといえる。つぎに、進学希望の ITE 生徒が学費の低い国立のポリテクを進路とするのに対し (Sim 2004), 進学を希望する日本の下位校生徒のほとんどが目指するのが学費の高い短大や専門学校などの私立教育機関であることを考えれば、出身階層の低い ITE 生徒が国から手厚く保護されているのとは逆に、同じく出身階層の低い日本の下位校生徒が進学先においてもレフトアウトされていることにほかならない。さらに、シンガポールのポリテクのカリキュラムが大学教育につながっているのに対し、日本の短大・各種専門学校のカリキュラムのほとんどが四年制大学教育に連続しないことを比較すれば、シンガポールにおける「敗者復活ルート」のほうがわかりやすく、逆に同じく「敗者」ともいえる日本の下位校生徒が政策的にもレフトアウトされていると言わざるを得ない。

一方、本稿の分析結果から、日本下位校の苦境打開策の一つが示唆されている。日本の下位校には、授業がおもしろいと思う生徒、または先生が学問的に優れてい

と思う生徒が多くはないものの、入学動機や進学アスピレーションなどほかの要因を統制した後でも、そう思う生徒ほど家で勉強していることが確認された。このことは、学校教育において、スループットの向上がアウトプットに寄与する可能性を示唆している。言い換えれば、学校の授業が生徒にとっておもしろいものになるよう工夫すれば、または教員訓練などを通して先生の能力を学問的に優れていると評価されるようにアップグレードさせるならば、生徒の学習意欲を高めることが日本でも可能であろう。そのうえ、シンガポールのように「敗者復活ルート」が目に見える形で国から下位校生徒に提供されれば、生徒の学習意欲も一段と高まることだろう。

学校での学習意欲は将来につなぐための「やる気」や活力にも関係すると考えられる。昨今、仕事をせず、教育も職業訓練も受けない「ニート」と呼ばれる若年層が増えている。この問題に、学校、とりわけ意欲の低い生徒が多く集まる下位校が無関心ではいられまい。「ニート」の予備軍を作らないためにも、下位校により多くの教育投資をし、優れた教師、優れた設備、優れたカリキュラムのもとで学校のスループットをより充実したものにするべきなのではないだろうか。

従来の研究では、近年日本社会におけるメリトクラシーの弛緩や不平等の拡大が指摘されながらも、問題の震源とされる低出身階層が集中する下位校の内部に踏み入った調査はほとんどなかった。日星比較研究を通して、選抜度の低い高校に分析の主眼をおいた本稿は、日本下位校のきびしい現状と課題を明らかにした。日本下位校のあり方は、学力の低い若者の問題にとどまらず、日本社会における階層間不平等の課題、引いては日本の将来にも通底する問題でもある。したがって、日本のメリトクラシー規範がいま以上に衰退しないためにも、下位校の改革は急務を要する課題となるべきである。本稿が、そのことについての理解を深めるための一助となることを願う。

〈注〉

- (1) 調査対象は、日本が北陸地方の公私立高校12校の三年生で、シンガポールは、日本の高校レベルにあたる高等教育予備門（ジュニア・カレッジ）、高等専門学校（ポリテクニク）、技術教育校（Institute of Technical Education, ITE）計7校の最終学年の生徒である。分析にあたり、日本の生徒は普通科上・中・下位、専門学科の上・下位、シンガポールの生徒は高等教育予備門の上・下位、高等専門学校、技術教育校の上・下位に分けられた。なお、シンガポールのポリテクや

ITE は厳密に言えばハイスクールという意味での高校ではないものの、教育年数や生徒の年齢からみれば日本の高校レベルにあたる中等後教育機関ではある。

- (2) もちろん、日本の場合でも従来の研究が指摘してきたように、学校間格差という形でのトラッキングは存在する。しかし、このトラッキングは、学校内部のものではなく、また政策的にも学校間格差の解消が進められてきたなどによりシンガポールと比較すれば明確なものとはいえない。
- (3) 日本の上・下位校生徒の間の差について、親学歴と親職とで有意差が認められているのに、家の豊かさでは認められない理由の一つとして、日本語質問紙のほうでは世帯月収ではなく、「家の豊かさ」という解釈のあいまいな指標が用いられたことが挙げられる。
- (4) The Straits Times, Weekly Subscription, 15 Dec 2001. 同発言は、超エリート的な存在ともいえるシンガポールの政府奨学生（7割以上の者が、人口の2割しか占めない高学歴の親を持つということについて述べたものであった。
- (5) 「（一日あたり）家での勉強時間」をたずねた質問をもとに、「しない＝0分」「30分以下＝15分」「30分から1時間＝45分」「1時間から2時間＝90分」「2時間から3時間＝150分」「3時間から4時間＝210分」「4時間から5時間＝270分」「5時間以上＝330分」とした。
- (6) 性別によるこうした効果は、シンガポールの統計局や教育省の公式データでも示されている。例えば、シンガポールでは、25歳以下の人口における女性の数がほとんどのコホートにおいて男性より少ないにもかかわらず、エリート校であるジュニア・カレッジや大学へ進学する女性の数は過去7年間ほとんど男性の数を上回っている。ただし、その解釈については一定の見解は得られていない。

＜参考文献＞

Clark, B. 1960, "The 'Cooling Out' Function of Higher Education," *American Journal of Sociology*, 65, pp. 569-576.

秦政春 1977, 「高等学校格差と教育機会の構造」『教育社会学研究』第32集, 67-79頁。

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編 2000, 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。

苅谷剛彦 2001, 『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。

耳塚寛明ほか 2003, 『メリトクラシー規範の比較教育社会学』平成13～15年度科学研究費補助金研究成果報告書。

Rodan, G. 1989, *The Political Economy of Singapore's Industrialization*, Palgrave Macmillan.

佐藤俊樹 2000, 『不平等社会日本』中公新書。

Sim, Choon Kiat 2004, 「シンガポールの教育とメリトクラシーに関する社会学的研究」『教育社会学研究』第74集, 269-288頁。

竹内洋 1995, 『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会。

Young, M. 1958, *The Rise of the Meritocracy*, Thames and Hudson.

ABSTRACT**Meritocracy at Post-secondary Schools in Japan and Singapore:
Focusing on Schools with Low Prestige****SIM, Choon Kiat**

(Graduate School of Education, The University of Tokyo)

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033 Japan

E-mail: simsimjapan@hotmail.com

This paper compares the characteristics of meritocracy in the Japanese and Singapore education systems, by analyzing the input, throughput and output of education at post-secondary schools with low prestige.

Based on survey data gathered from students studying at low-ranked post-secondary schools in both Japan and Singapore, this study first illustrates the fact that most students from these schools belong to low social strata and have low academic achievement. However, as Singapore schools provide low-performing students with access to not only good jobs but also to higher education, Singapore students who are given such double chances show more positive attitudes and expectations upon admission to these schools, when compared to their Japanese counterparts who are given no such chances at all. Data from the survey also bring up an image of lively schools in Singapore, with interesting lessons and competent teachers, who emphasize the importance of study and encourage students to perform well. Japanese schools, however, are dull, with none of these features. This study further demonstrates that while the aspirations of students in Singapore are increased during their course of study, those of Japanese students remain low throughout. Nevertheless, some Japanese students from low-ranked schools also do spend time on study, and the more they find their lessons interesting or their teachers competent, the longer they study. It is thus concluded that while Japanese students are 'left out' to fend for themselves, the output of their education can be maximized by enriching the throughput at schools.

To date, many research findings have indicated a decline in meritocracy and an expansion of inequity in Japanese society, but few have ventured into the epicenter of the issue, i. e., schools with students who are poor and who do not study. This comparative study shows the plight of low-ranked Japanese schools and advocates the urgent need for more research and reform efforts.